

## 地域循環共生圏フォーラム 2024 開催レポート

2024年11月14日の「地域循環共生圏フォーラム2024」(オンライン開催)は、おかげさまで延べ1,500名以上の方々にご参加いただき、大盛況のもと、終了いたしました。お申込み・ご参加いただいた皆様、誠にありがとうございました。

オープニングセッション・分科会のいずれにおいても、地域づくりのワクワク感の醸成・モヤモヤ感の解消に繋がる様々なノウハウ・ヒントが共有され、質疑応答の時間には多くのご質問もいただきました。

本レポートでは、当日の各登壇者のご発表内容・ポイントや参加者の感想をお伝えします。当日参加された方も、参加できなかった方も是非ご覧ください。

### オープニングセッション 「ウェルビーイングなまちづくり」

#### 【基調講演】

前野 隆司 氏 (慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科 教授、武蔵野大学ウェルビーイング学部 学部長)

#### 【対談】

前野 隆司 氏 × 尾山 優子 氏 (一般社団法人環境パートナーシップ会議 理事、事務局長)  
ファシリテーター: 高橋 真寿美 氏 (地域循環共生圏プラットフォームコーディネーター)

#### 【概要】

前野氏からは、そもそもウェルビーイングとは何かについてご説明いただき、精神的に良好な状態の条件である「幸せの4因子」(やってみよう因子、ありがとう因子、なんとかなる因子、ありのままに因子)について具体的にお話いただきました。前野氏が取り組まれた地域づくりの事例紹介もしていただきました。

対談では、尾山氏から地域循環共生圏の事例紹介を通じて、「私らしさ」を「地域らしさ」と読み替えると地域の環境も見えてくることをお話しいただいたうえで、前野氏からウェルビーイングと地域循環共生圏との共通点についても触れていただきました。

参加者からは、“地域資源を活用した地域づくりが幸せにつながるということに共感した”、“ウェルビーイングについて、今まではよくわからなかったが、より理解が深まりました”、“新たな視点で地域での取り組みを考えるきっかけとなりました”といった感想が寄せられました。

#### ！ポイント！

- ・ 「地位財」型(地位、収入等)の幸せは長続きせず、「非地位財」型(社会、身体、精神が良好な状態)の幸せは長続きする。
- ・ 地域循環共生圏づくりや地域づくりに取り組むことがウェルビーイングにつながる。
- ・ 日本から「地域循環共生圏」を世界に広め、「地球環境共生圏」になるように皆で力を合わせよう。

## 分科会①「持続可能な地域をつくるとは？～先輩の経験に学ぶ、地域循環共生圏づくりのやり方～」

### 【登壇者】

平田 英治 氏(NIIGATA MUSIC LABORATORY 代表)

小原 賢二 氏(社会事業化団体 SHE)

江口 健介 氏(GEOC(地球環境パートナーシッププラザ))

### 【概要】

地域の人たちが地域について気軽に語り合う場を作り、地域のやりたいことを実現している NEW HOPE プロジェクトの成果や事業を進めるうえでの工夫、苦労したお話などをご紹介します。

参加者からは、“色々な事に取り組みされており、また裾野を広げるための活動に共感が持てた”“先進事例を聴けて、当町でも今後の事業の参考にしたい”といった感想が寄せられました。

### ！ポイント！

- ・ 一つの成果を目指すのではなく、何かが生まれる場を作り続けることで、地域の人々のやりたいことと地域課題をつなげて実現している。
- ・ 地域課題に対し、かしこまった議論をするのではなく、来る側がプレッシャーに感じない気軽に行ける空間を作ることでラフな対話を生み出している。
- ・ 一見、同じ地域課題に見えることでも、人によって課題の捉え方そのものが異なるという事実をまず認識しあうことが大事。

## 分科会②「森林資源活用で逆境を乗り越える。下川町の挑戦！」

### 【登壇者】

山本 敏夫 氏(下川町 総務企画課長 兼 地球温暖化対策推進室長)

### 【概要】

山本氏からは、鉱山の閉山、産業構造の変化とそれによる人口急減を経験した下川町が、循環型森林経営やバイオマスエネルギーの活用などを通じて、ピンチをチャンスに変えて、地域課題を解決し続ける取組についてご紹介いただきました。

参加者からは、“地域循環共生圏あるいは、持続可能な地域づくりとして地域への広がりや実質的な面で効果が出ている取り組みだと感じた”、“町が主体的に町民や関係機関団体を巻き込んで進めていく事例で参考になった”といった感想が寄せられました。

### ！ポイント！

- ・ 下川町は経済(森林総合産業構築)、社会(超高齢化対応社会構築)、環境(エネルギー自給と低炭素化)の3側面を軸に統合的な課題解決を目指してきた。エネルギー自給の向上や地域資源活用による新産業の創出など、超高齢化社会や低炭素化への対応による地域内共創に加えて、地域外の関係者とも知識や技術を補完し、支え合う“共創”関係を形成してきたことが、課題解決をし続ける秘訣になっている。
- ・ 人口減少を起因とする地域課題解決には、「しもかわ財団」のように専門的な役割と行政と地域の間隔的な立場から、地域課題解決への取組の総合的な支援が必要な場合もある。

### 分科会③「このままでは持続不可能？地域をリバース（reverse, rebirth）させよう！上田リバース会議」

#### 【登壇者】

浅輪 剛博 氏(一般社団法人自然エネルギー共同設置推進機構(NECO) 企画部長)

#### 【概要】

浅輪氏からは、長野県上田市のファクトに基づく持続不可能性と、それを持続可能に変えていくためにみんな(市民・行政・事業者・金融機関・議員等)で考えた過程をご紹介します。

参加者からは、たくさんのステークホルダーの集め方や合意形成のやり方について多くの質問があり、“具体的な事例・取り組み内容が多く参考になった”、“各主体との連携についてとても勉強になった”といった感想が寄せられました。

#### ！ポイント！

- ・ 脱炭素(再エネ、断熱、交通まちづくりなど)の活動は、まちの課題解決や地域の人が叶えたいことの実現につながる、多くの人に関心をもってもらえる活動である。
- ・ 市民と行政は対立するものでなく一緒に地域を運営していく仲間である。意見交換は小グループに分けて行い、匿名でも意見を出せるようにするなど工夫した。誰でも発言することができ、活動に参加した実感を味わってもらうことで、多くの人が続いて参加することにつながった。
- ・ 様々なしがらみで「できない理由」、「やりにくい理由」が出てくるが、みんなで何度も「Why」を繰り返し、解決策を探す。この解決策を見出すプロセスをみんなで共有することで、自治力が高まる。

### 分科会④「地域の資源をふんだんに使って地域の力を強くする！真庭の強さの秘訣」

#### 【登壇者】

石田 明義 氏(真庭市生活環境部環境課 課長)

藤田 浩史 氏(真庭市産業観光部農業振興課農政企画室 室長)

牧 一穂氏(十字屋グループ 代表)

#### 【概要】

石田氏からは、真庭の脱炭素・SDGs に関する取組について、時系列を追ってお話いただきました。

牧氏からは、十字屋グループの地域、自治体、国、海外を巻き込んだ様々な取組について動画などを踏まえ、分かりやすくご紹介いただきました。

参加者からは、“異なる主体間の連携が複層的にあり、かつ、資源や経済の循環だけでなく、自然生態系のつながりまで視野に入れておられることに感銘を受けました”、“地域での取組は民間事業者だけでなく、自治体職員の熱意も重要で、お互いに汗をかくことが必要だと学んだ”といった感想が寄せられました。

#### ！ポイント！

- ・ 「隣の芝生は青く見える」かもしれないが、地域が一体となって、自らの地域にある資源を見つめ直し、新たな組み合わせを考えてみる。
- ・ 問題点ばかりを見るのではなく、視点を変えてみることで価値観が変わる。
- ・ 「置かれた場所で咲きなさい」という言葉があるように、現在置かれた環境で、自分の役割や義務を果たすことが重要。

## 分科会⑤「1,000 人の有志と取り組むネイチャーポジティブな地域づくり～阿蘇の草原を次世代に～」

### 【登壇者】

増井 太樹 氏(公益財団法人阿蘇グリーンストック 専務理事)

### 【概要】

阿蘇の草原の機能・現状や、草原維持に欠かせない作業である「野焼き」の支援ボランティア数増加・リピート回数増加のための戦略、自然共生サイト登録への狙いについてご紹介いただきました。ボランティアの活性化に向けて、参加回数に応じた特典制度・交流会の開催などやりがいを感じてもらおう取組や、ボランティアの安全対策に関する取組を実施しています。

参加者からは、“新たな人材の確保と既存の人材の高齢化を解決するための取組事例であったことから、自分の地域にも生かせそう”といった感想が寄せられました。

### ！ポイント！

- ・ 草原の管理の主役は地元の方。地元の方が困っているところを支援することで、地元から信頼され、必要とされるボランティア団体になった。
- ・ ボランティア参加者数・リピート数増加のためには、ボランティアの満足度を上げる仕組みが必要。安全に作業するための作業服の貸与や研修制度で「安心して参加できるボランティア」を実現。またボランティア同士が集まれる場を作ることでコミュニティが活性化し、「参加したくなるボランティア」を実現している。

## 分科会⑥「地域づくりに関わる主体をどんどん巻き込む！戦略的人たらしになる極意とは」

### 【登壇者】

岡見 厚志 氏(環境パートナーシップ協議会 サソテナやお 副代表、World Seed 代表理事)

### 【概要】

岡見氏からは、八尾市で取り組んでいる希少生物である「ニッポンバラタナゴ」の保全から始まり、廃校を拠点とした活動へと展開している八尾での地域づくりについて紹介いただきました。

具体的には、地域住民、不動産屋、コミュニティナース、行政職員、大学生など、実に多様な主体を地域づくりの主体として巻き込み、また、その応援者として近畿日本鉄道や地域の中小企業をも巻き込んだ取組に発展させている事例となります。

参加者からは、“企業との連携など地域課題解決にむけて、多様な人を巻き込むコツを知ることができた”、“ネットワークを広げるための具体的な取組を聞いた”といった感想が寄せられました。

### ！ポイント！

- ・ 地域づくりに関わる主体を巻き込むには、一朝一夕にはできないが、地域の交流会などへの参加を通じて地道に関係性を構築することである。
- ・ 一人のコーディネーターが中心になって巻き込むのではなく、それぞれの主体がいろんな人を巻き込むことで、八尾市の地域循環共生圏づくりを実現している。
- ・ 個人のやりたい思いを全体で共有したうえで、共通のビジョンに落とし込む。それぞれのやりたい思いとビジョンにずれがないかを定期的に確認していくことが重要。
- ・ いろんな主体間で共通の理解を得ることに時間はかかるが、映画のワンシーンのように全員がイメージできるもので考えていくことが重要。

## 分科会⑦「ぼちぼち山業（さんぎょう）で豊かな生活スタイルを ～ゆる～く始める地域づくり～」

### 【登壇者】

白井 理恵 氏(NPO 法人大月地域資源活用協議会)

岩瀬 文人 氏(四国海と生き物研究室 代表)

### 【概要】

白井氏・岩瀬氏からは、高知県大月地域における、地域の人が肩の力を抜いて、生活の一部として当たり前に関われるような地域づくりの取組についてご紹介いただきました。具体的には、仲間づくりのポイントや地域資源(山林資源)の活用方法、活動を展開する際の工夫など、実践をもとにお話いただきました。

参加者からは、“人の(地域の)巻き込み方が良い意味で戦略的過ぎず現実的で、しっかりと現場を見ながら一步步取り組む姿は大変参考になりました”、“地域の実情を浮き彫りにしつつ、その課題をどのように解決しているかのプロセスを、わかりやすく語っていただき、前向きに取り組もうという気持ちが変わってきた”といった感想が寄せられました。

### ！ポイント！

- ・ 地域づくりの最初の一步、仲間探しのためには地域の人に挨拶をしたり、地域の活動に参加したり、まずは地域になじんで話を聞いてもらうこと。そこから輪が広がる。
- ・ 事務所の蔵に大量の薪を置くなど、活動内容について実際に目で見て分かる形で示すことで事業の認知が広まり、応援者が増えた。
- ・ 直接事業に関わってくれる人を見つけるためには、自分たちがロールモデルとなり、活動が生業や収入につながる事業として成り立つことを証明し発信することが重要。

## 分科会⑧「地域が元気になる！環境・社会・経済の同時解決とは？～持続可能な地域を未来へつなぐ菜の花エコプロジェクト～」

### 【登壇者】

伊藤 真也 氏(NPO 法人愛のまちエコ倶楽部 事務局長)

### 【概要】

伊藤氏からは、「菜の花エコプロジェクト」の源流となった「せっけん運動」から、どのように「菜の花エコプロジェクト」が生まれていったか、そして持続可能な未来に向けてどのような新しい取組をしているかなどの菜の花エコプロジェクトの過去、現在、未来についてお話いただきました。

参加者からは、“試行錯誤して取り組みを積み上げてきた経緯がよくわかった”、“循環型の街づくりに取り組んでいるのが印象的だった”といった感想が寄せられました。

### ！ポイント！

- ・ 菜の花エコプロジェクトは、菜の花を様々な形で活用(菜種油、せっけん、バイオディーゼル燃料等)することを通じて、地域内の資源循環を実現している取組み。
- ・ 菜の花エコプロジェクトの源流となった「せっけん運動」は、市民に自分たちの問題は自分たちで解決しようというマインドから生まれたものであり、自分事として主体性をもちながら地域課題に向き合う姿勢が大切。
- ・ 市民と行政が地域課題を解決するために相互補完しながら協働することが重要。
- ・ 多種多様なバックグラウンドを持ったメンバーが活動しており、地域とともに、地域課題と向き合いながら

一歩ずつ進んで、次世代につないでいこうというビジョンを共有できている。